

よし だ ただし 吉田 正

国民に夢と希望を与えた作曲家 日立市



(吉田事務所提供)

大正 10 年 (1921) - 平成 10 年 (1998)。多賀郡高鈴村助川〔日立市〕生まれ。小学校卒業後、日立工業専修学校入学。卒業後上京して働きながら作曲を学ぶ。昭和 17 年 (1942) に召集され、満州〔中国の東北部〕に向かう。戦後シベリア〔ロシア〕での抑留生活を経て、昭和 23 年 (1948) に復員。翌 24 年 (1949)、日本ビクターの専属作曲家となる。同 32 年 (1957) に「有楽町で逢いましょう」が大ヒット。同 35 年 (1960) に「誰よりも君を愛す」、同 37 年 (1962) に「いつでも夢を」で日本レコード大賞受賞。生涯の作曲数は約 2,400 曲。日本音楽著作権協会長、日本作曲家協会長を歴任。平成 10 年 (1998) に国民栄誉賞受賞。同年に日立市名誉市民として顕彰される。

吉田正は、多賀郡高鈴村助川〔日立市〕に生まれました。地元の助川尋常高等小学校に入学した正は、ガキ大将として遊び回っていましたが、成績は良くクラスで三番以下に下がることはなかったといわれています。音楽も上手で、オルガンをひいてクラスのみんなに歌を教えたこともありました。小学校を卒業すると、日立製作所で働く技術者を養成するための日立工業専修学校に入学しました。入学後の正は、音楽好きの仲間、マンドリンやギター、アコーディオン、バイオリンなどの楽器で楽団をつくって、町内の演芸会などに出演していました。

(これからもずっと音楽にかかわっていきたい。そのために東京へ出て一人で生活しよう。)

こう考えた正は、父に決心を打ち明けますが、父は猛反対しました。しかし、正の決心は変わらず、昭和 14 年 (1939) 3 月、日立工業専修学校を卒業すると、わずかな身の回りの品と一本のギターだけを持って東京へ出ました。東京の会社に就職した正は、仕事をしながら、音楽の先生に基礎から教わりました。

しかし、昭和 17 年 (1942) に軍隊に入った正は、満州〔中国の東北部〕に行くことになりました。次の年、正は盲腸炎になってしまい、1 か月ほど入院しました。そのベッドで、戦後大ヒットした「異国の丘」のもとになった歌を作曲しました。

昭和 20 年 (1945) 8 月には、戦場で大けがをして意識不明となり、生死の間をさまよいました。幸いけがは回復しましたが、シベリア〔ロシア〕の捕虜収容所に入れられ、森林の伐採の仕事させられました。配られる食料はわずかで、栄養失調で亡くなる人もいました。厳しい生活の中で、正は捕虜仲間やロシア人労働者から小さくなった鉛筆



作品のレコードジャケット
(吉田正音楽記念館提供)

をもらい、木の皮やセメント袋の切れはしなどに歌詞を書き、五線を引いて作曲していました。正にとって、歌をつくることが生きていくあかしだったので。作業の行き帰りには、正の作った歌をみんなで歌って励まし合っていました。

昭和23年(1948)、やっと日本に帰国することができた正は、日立市に住んでいた父と兄の家族が空襲で亡くなっていたので、神奈川県に住んでいる姉の家に身を寄せました。その年、「異国の丘」という歌がNHKの「のど自慢」で歌われ、ラジオから何度も流れていました。ラジオ局がその作曲者を探していたので、正は名乗り出て作曲者として認められました。この歌は大ヒットし、次の年、レコード会社に作曲者として入ることになります。

(生きていくことは大変なことです。しかし、生きていくって素晴らしいことです。)

このことを音楽を通して世の中のみんなに語りかけていきたいと考えた正は、多くの歌を作曲します。そして、「有楽町で逢いましょう」や「いつでも夢を」など、現在でも歌い続けられているヒット曲をたくさん作りました。作曲した歌は約2,400曲にもなります。また、日本音楽著作権協会会長、日本作曲家協会会長などの要職につき日本の音楽界の発展に尽くしました。

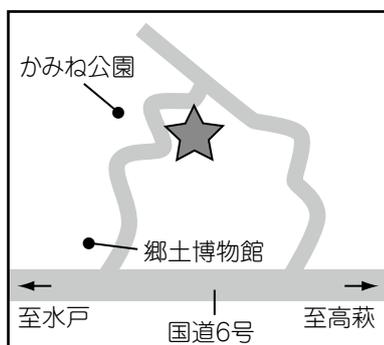
正は、平成10年(1998)6月に亡くなりますが、同じ年の7月、「数多くの歌謡曲を作り国民に夢と希望と潤いを与えた。」として国民栄誉賞を受章しました。

ゆがりのスポットに行ってみよう

吉田正音楽記念館

所在地 日立市宮田町5-2-25(かみね公園内)

内容 吉田正の功績を後世に伝えるとともに、音楽文化の振興の拠点として、平成16年(2004)に建てられました



おもな 参考文献

『生命ある限りー吉田正・私の履歴書ー』(日立市民文化事業団・2001)

『常陽藝文253号』(常陽藝文センター・2004) など